

# Uma noite da Ibéria イベリアの夜 Una noche de Iberia

«Olé»

23 de outubro/octubre, 2010

Marie Mine (canto) – Masami Takaba (viola/guitarra)

うた：峰 万里恵 ギター：高場 将美

## I

### 1. アヴェ・マリーア・ファディシュタ *Avé Maria fadista*

詞：ガブリエール・ド・オリヴェイラ Gabriel de Oliveira

曲：フランシーシュ・ヴィアーナ・《ヴィアニーニャ》 Francisco Viana "Vianinha"

作詞者（1953年、62才で没）は、第一次世界大戦で、ポルトガル海軍に所属し功労があったとのこと。その後、お役人をしながら、ファドの歌詞をたくさんつくりました。とくに民衆の信仰心をうたった曲で有名です。伝統的なファドでは、まず歌詞があって、その後、それにふさわしいメロディを借りてきます。同じメロディでも、歌詞によって、また歌手の表現技術で、うたわれるたびに微妙に変化します。この曲のメロディは、歌手でギターラ（ポルトガル・ギター）奏者だったヴィアニーニャ（1895–1945）の作とされ、たいへん多くの曲に使われています。

神聖なマリアに讃えあれ。気高い美しさへの、この、あまりにも小さな祈りの歌。

すべての女性のうち、もっとも祝福されたお方、あなたはイエスを身ごもられた、愛とかぎりない恩寵のもとに。

痛みの聖母マリア様、ファドをうたい弾くことが罪

ならば、わたしたち罪びとのためにお祈りください。

ファドをうたうものはだれも、運に恵まれないものばかりです。わたしたちのためにお祈りください、母なる処女よ。今も、いつも、そしてまた、わたしたちの死の時にも。

### 2. つめたい明るさ *Fria claridade*

詩：ペドロ・オーメン・ド・メロ Pedro Homem de Mello 曲：ジョゼ・マルケシュ José Marques do Amaral

ペドロ・オーメン・ド・メロ（1904–1984）はポルト出身で、職業は弁護士、後にポルトガル語教授といったところですが、一般にはただ詩人として知られています。またミーニョ地方の民俗研究にも情熱をかたむけ、みずから音楽・舞踊グループをひきいていたこともあります。この詩は、歌手アマーリア・ロドリゲシュさんが読んで感動し、作者の許可を得て、ファドとしてうたうことにしました。彼女がこの詩のために選んだメロディの作曲者は、1920年代から活動していたギターラ奏者とのこと。ペドロ・オーメンは、自分の詩がファドになって多くの人に知られることで、アマーリアさんに深く感謝しました。彼女はその後数々の彼の詩をうたい（ときには、大胆にも大幅な削除などの編集をして）、また彼のほうから、オリジナルな歌詞として書き下ろすこともありました。

あの、あんなにも悲しい日の、明るさのまんなかで、大きかった、街は大きかった。

そしてだれも、わたしのことを知らなかった。

そのとき、わたしのところを通り過ぎたふたつの目。通り過ぎた後に美しかった目。

わたしは夢を見ているのだと思った。とうとう、世界にそのふたつしかないような、ふたつの目を見て。

わたしのすべての感覚の中に、

わたしは神の予感をもった。あの、あんなに美しい両目は、わたしの両目から離れていった。

わたしは目を覚まし、明るさはもっと大きく、もっと冷たくなった。

大きかった、街は大きかった。そしてだれも、わたしのことを知らなかった。

（右写真：詩人ペドロとダンスするアマーリアさん）



### 3. わが過ち *Erros meus*

詩：ルイーシュ・ド・カモンエンシュ *Luís de Camões* 作曲：アラン・ウルマン *Alain Oulman*

カモンエンシュ（日本では、簡単に「カモエンス」と表記されることもある）の壮大な長詩『ウズ・ルジーアダシュ』は、古代ギリシアの叙事詩のように、大航海時代のポルトガル人の、東洋への冒険の船旅を描いたもので、ポルトガル文学の金字塔といわれています。ここでうたわれる詩は、叙事詩を離れて愛の嘆きのうた——1616年に出版されたそうです。作曲者は現代人で、リスボン近郊に生まれたフランス人。アマーリアさんがうたうために、伝統を尊重しながら新しいファドの作曲を手がけました。この詩は、元来ソネット（14行詩）ですが、ファドの型にして効果を挙げるために、巧みな繰り返しの技法を使っています。その他は、ことばも、詩句の順番も、まったく原作を変えていません。

わたしの過ちの数々、悪い運命、燃える愛が共謀して、わたしの破滅をもたらした。過ちたちと運命は余計なものだった。わたしの破滅には、燃える愛だけでじゅうぶんだった。

わたしはすべてを通り過ぎてきた。でも、今でも目の前にありつづけるのは、過ぎたことどもの大きな痛み。そこで、悩んでいる怒りたちが、わたしに教えたのだ。もう決して、心満ち足りた人間になろうと思わ

ないことを。

わたしは、わたしのすべての歳月を過ごすあいだ、まちがいつづけてきた。運命の女神に、わたしを罰する原因を与えてしまった、わたしの根拠のない希望を罰するように。

愛について、わたしはただ、つかのまの偽りしか見なかった。おお、だれが満足させることができるだろうか、わたしの、このかたくなな復讐の念を！

### 4. わたしは海へ（いわしを探しに行きました）

#### *Fui ao mar buscar sardinhas*

詞：アマーリア・ロドリゲシュ *Amália Rodrigues* 作曲：カルロス・ゴンサウヴシュ *Carlos Gonçalves*

アマーリアさんは、歌手になった十代のころから自分でつくった歌詞をうたっていました。ただしステージ活動が忙しかったので、詩を書く時間はあまりとれませんでした。後に病気で活動を休んだのをきっかけに、思いつくままに歌詞を（はじめは、うたうためではなく）書きとめていくようになりました。この歌詞への作曲者は、長くアマーリアさんのために演奏したギターラ演奏家です。

わたしは海へ、イワシを探しに行きました、わたしの恋人に上げるため。でも汽船からのぞき見している丸い小窓たちのあいだで道に迷ってしまいました。

汽船からのぞき見しているとあるフランス男の顔が見えました。もうどうなってもいい。わたしはまた海に出かけます。

わたしはまた海へ行きました。汽船は出港していきました。もうフランス男は見えず、わたしはずぶぬれで帰ってきました。

わたしから希望がすべて飛び出した。海からイワシが飛び出した。天秤（てんびん）ばかりからノミが飛び出す。それはいいのよ、わたしのじゃないから。

わたしは海へイワシを探しに行く。もうフランス男のことは忘れた。わたしが思ったことじゃない。あなたの知ったことでもない。

海に出かけてきたあとで、わたしの思ったことは、わたしには砂が入っちゃったらしいということ。それも入ってはいけないところへ。

……これは謎々ではありません。わたしは謎をかけるのはきらい。要するにわたしは海へ出かけたということ。イワシを探しに行った。それは判ったでしょう？

海に行くイワシは気持ちいいにちがいない。水はあるし、泳ぎは上手。わたしもイワシになりたいな。

### 5. ファド・メイエール *Fado Mayer*

作詞：ジョアオン・リニャールシュ・バルボザ *João Linhares Barbosa*

曲：アルマンディーニョ *Armando Freire "Armandinho"*

タイトルは特定の曲名ではなく、このメロディの名前なのですが……。

作詞者は、最高の「ファドの詩人」とあらゆる人々に認められた、民衆文学の巨匠といえます。街角の即興歌手としてスタートし、1920年代から、ファド専門誌の編集・発行、プロのファド・アーティストの活動する専門の会場の設立などで、ファドを社会的に認知させるのに大きな貢献をしました。1930年ごろまで、ファドが聴ける場所はレビューやヴァラエティ劇場の1シーン、あるいは料亭でのパーティ、あるいは町内の酒場でした。一般向けの、ファド専門の場所はなかったのです。

作曲者は、ファドのギターラの歴史上のもっとも重要な音楽家です。単なるギターラ演奏家・作曲家ではなく、古くからの伝統曲を正しく後世に残すために、規範となる楽譜をつくりました。さらに、史上初めてファド専門のホール

《ファド芸術サロン》を設立、やがて《カフェ・ルーズ》というファド専門のライブハウスの芸術監督・経営者となりました。今日のカザ・ド・ファド（ファドの家）と呼ばれるレストランの先駆です。ファド芸術サロンは、メイエール広場にありましたので、このメロディにその名をつけたのでしょう。

メイエール広場は、1930～40年代には、数々のレビュー劇場や、酒場・レストランが並び、リスボンの大衆エンターテインメント・センターでした。

なお、この曲は『彼女のことを悪く言わないで』というタイトルで、1940年代に男性歌手マックスがうたってヒットしました。後に、アマーリアさんがうたうために、歌詞の一部を作詞者自身が書きなおしたようです。

彼は悪い男だった——わたしは嘘はつかない——裏表があって、どうしようもない男。品性が低くて冷酷だった。でもわたしは承知しない、わたしのそばで、あなたが彼を悪く言うことは、あなたは薄っぺらな人間だ。許されることではない、するべきことではない、ここにいない人を悪く言うことは

すべてはくずれた、砂でできた城のように。いやだ、わたしはがまんできない。そして望まない、いまだにわたしを痛めている痛みを、ふたたび舞台上持ち出すことは、あなたにはなんの関係もなかったのに。

あなたは自尊心をもつべきだ。そしてあのことを、わたしに思い出させてはいけなかった。いまはもう遅い、どちらが悪いか決めるには、あなたもそのことはよくわかっている。

神様が彼をお守りくださいますように、数々の不運から。そしてまた わたしたちをお守りください。

いいえ、わたしにはがまんできない。あなたが彼のようにでないことを、悲しんでいるのだったらいいけれど……。彼は悪い男だった。でも、あなたが彼のようにでないことが、わたしの受けている罰をもっと大きくする。

## 6. マリーア・デ・ラ・オー *María de la O*

作詞：ラファエル・デ・レオン／サルバドル・バルベールデ *Rafael de León / Salvador Valverde*

作曲：マヌエル・キローガ *Manuel Quiroga*

作者たちはいずれもセビージャ出身で、「コブラ」と呼ばれるジャンル（スペイン歌謡）の、最高の巨匠たちです。レオンとキローガが実際の作者で、バルベールデは脚本作家（曲のあらすじを考える）です。この曲は、彼らの最初のヒットといわれ（1935年）、十代のヒターナ、カルメン・アマージャ主演で同名の映画もつくられました。歌をヒットさせたのは、エストレジータ・カストロで、彼女は、セビージャ人ならではのおしゃべりの回転の速い楽しさを生かして、後にコメディアンとしても、大の人気者になりました。

題名は主人公の名前ですが、聖なる処女マリア様にちなんで付けられるものです。「O（オー）の文字のマリーア」は「エスペランサ（希望）のマリーア」とも呼ばれる、イエスの誕生を待っている姿です。祭日は12月18日（クリスマスの1週間前）。おなががふくらんでいて、全体にOの文字のように丸いイメージのマリア様なので、中世からこう呼ばれているとのこと。カトリックの権威の正式見解では、その日のミサの歌詞の各句が、「オー」という感嘆詞から始まるからというのが正しい由来だと言われます。

わたしの両手に数々の金の指輪。わたしの数々の気まぐれのためにお金。そしてわたしのからだを着飾るために、刺繍のマントーン、絹のドレス。

わたしが月を頼めば、わたしは月をもらえる。だって、そのためにわたしのパジョ（ヒターノでない男）は、アラブのサルタンよりもたくさんのお金を持っている。

わたしが着飾っているのを見て「あなたの幸運がうらやましい！」と言う女たちがいる。でも、彼女たちは知らない、わたしのほうでは、彼女たちのみんながうらやましいことを。

あの人ののどの渇きのために、わたしは水だった。あの人の寒さのためには焚き火だった。そしてあの人の愛するキスのために、わたしは彼の両腕のあいだにまかせた、わたしの褐色の肉を。

あのわたしたちの愛のような愛は、世界にふたつとない。呪われろ、お金！ おまえは、こうやってあの人のそばから わたしを遠ざけた。

「おまえは女王様以上にあげよう！」と、あのパジョはわたしに言った。そしてわたしは彼を信じた。今は、わたしの命とわたしの黄金を、わたしは与えたい、むかしのわたしに戻れるなら。

マリア・デ・ラ・オー！ おまえはなんと不幸な女だろう、ヒターナ、すべてを持っていながら！

おまえは人を笑ってやりたい。でも悩んで泣いて、両目が赤くなっている。

呪われろ、お金！ おまえのせいで、わたしは、あのヒターノを捨てた、わたしの愛だった人を。

神の下した罰！ それはおまえが背負ってゆく十字架。マリア・デ・ラ・オー！

## 7. 3人のモーロ娘 *Las tres morillas*

スペイン15世紀古謡 編：フェデリコ・ガルシア・ロルカ *Federico García Lorca*

世界的にもっとも有名で愛されているスペインの詩人ガルシア・ロルカは、若いころは音楽家をこころざしていました。民俗音楽の採集や編曲も、最高権威者の指導を受けました。歌詞に出てくるハエーンは、アンダルシア州にあり、現在はオリーブなど農産物に定評があります。

3人のモーロ娘が、わたしを恋におとした、ハエーンの町で。名前は、アシャと、ファティマと、マリエーン。

こよなくあでやかで、気品ある3人の娘たちは、オリーブの実をつみに入った。そして、もうだれかがつんでしまっているのを見つけて、気を失ってしまった。ハエーンで失われてしまった色たち。

あざやかに美しい3人のモーロ娘たちは、ハエーンで、りんごをつみに行った。

わたしは彼女たちに言った。「あなたがたは、どなたでしょう？ わたしの命をとってしまうお方たち」「わたしたちはキリスト教徒。かつては、ハエーンで、モーロ（イスラーム教徒）でした」

3人のモーロ娘が、わたしを恋におとした、ハエーンで。アシャと、ファティマと、マリエーン。

### II

## 1. 貧しいことは不幸ではない *Não é desgraça ser pobre*

詞：ノルバールト・ド・アラウージョ *Norberto de Araújo* 曲：ジョゼ・J・カヴァリエイロ

《ファド・メノール・ド・ポルト》 *José Joaquim Cavalheiro "Fado menor do Porto"*

作詞者はジャーナリストで、リスボンの街の人々の伝統を守り育てる活動で知られ、現在アルファーマ地区の重要な坂道に彼の名前が付けられています。メロディの作者は、歌手でギター奏者（コインブラ出身？）だったようです。なお、歌詞に出てくる「ファド」は、歌を指すと同時に、文語で「運命、宿命」という意味を重ねています。

貧しいことは不幸ではない。頭がおかしいことは不幸ではない。不幸なのはファドをもってきていること、心のなかに、口のなかに。

銅の小さなコインは、銀のよりも価値がある。貧しいから死ぬということはないのだから、貧しいことは不幸ではない。

このバラバラに乱れた人生では、幸福であるのはたいしたことではない。頭のおかしい女は何も感じない

のだから、頭がおかしいことは不幸ではない。

生まれるときわたしは、星をひとつもってきた。そのなかに運命が刻みこまれていた。それをもってきたのは不幸ではない、不幸はファドをもってきたこと。

不幸は、貧しい仲間みんなで歌いすぎて、もう声もかれて、さまよい歩きまわること。そしてファドをもちつづけること。かたくなに、大胆に、心のなかに、口のなかに。

## 2. ロマンズ *Romance*

詩：アフォンソ・ロペシュ・ヴィエイラ *Afonso Lopes Vieira* 作曲：カルロシュ・ゴンサウヴシュ *Carlos Gonçalves*

タイトルは中世からイベリア半島に伝わる物語り詩のスタイルを指します。この詩を書いたロペシュ・ヴィエイラ（1878—1946）は、多方面で活動した文学者です。作曲者は、先にご紹介したギター奏者です。

真夜中すぎに *truz, truz...* わたしの扉をたたくものがいた。どこから来たのだ？ おおわたしの魂。「わたしは死んで、ほとんど死んで、やってきました」

もうわたしには、ほとんど、彼女がわたしの魂だとわからなかったほど、変わり果ててやってきた。どこもすっかり裂けていた、彼女の、つばめの2枚の翼。

わたしは彼女に夕食を用意させた、そこにあったいちばんおいしい食べもので。

どこから来たのだ？ おおわたしの魂。もうわたしにはほとんど彼女だとわからなかったほど。

でも、もの言わぬわたしの魂は、見つめるだけで、なにも答えなかった。そして彼女の美しい両目には、どれほど多くの悲しみがあつたことか！

わたしは彼女にベッドを用意させた、わたしのもっていたいちばん良い着るもので——上には赤いダマスカス織りの絹、下にはこまやかな麻。

眠れ、眠れ、おおわたしの魂。おまえを眠りにつかせるために、わたしの口がひとりで、うたっている、泣き出したい気持ちとともに。

わたしの口が、ひとりでうたっている、泣き出したい気持ちとともに。

### 3. 真っ赤な帯 *Cinta vermelha*

詞：ジョアオン・リニャールシュ・バルボーザ *João Linhares Barbosa*  
曲：マガーラ／アカーシオ・ゴメシュ *José Carlos "Magala" e Acácio Gomes*

ふたたび「ファド詩人」の歌詞。1930年代からファド最高のスターだった女性歌手ベルタ・カルドーゾのために書かれました。タイトルは、闘牛士がベルトがわりに胴に巻く、幅広の帯を指しています。メロディは、歌手とギター奏者のゴメシュ兄弟のつくったものです。歌手の通称をとって《ファド・マガーラ》と呼ばれています。

この赤い帯を巻きなさい、あなたの胴を細くするため。わたしはほかの女たちみんなに見てほしい、あなたが美しい姿をしていることを。

きょうは闘牛をやることになっている。わたしはもう最前列を2枚買った。そしてこのことは話の種になるだろう、ファドを歌う女たちが口々に。

わたしは仲間の女たちに、この冒険を知ってもらいたい。ファドではもう噂がささやかれている。わたし

とあなたが同じランクの人間だと。この真っ赤な帯を巻きなさい、あなたの胴を細くするため。

わたしは赤い髪留めを挿す、赤はピリッと辛い味を足すから。わたしは両耳にリングを着ける、挑発的に見えるように。わたしは わたしの愛する人にのぞむ——わたしの狂おしく愛する人に——。

彼はもう高いところの人間、背も高い。ほかの女たちみんなにうらやましがらせたい。わたしは、すべての人に見てもらいたい、彼の姿のよさを。

### 4. あの通り *Aquela rua*

詞：ジョアオン・リニャールシュ・バルボーザ *João Linhares Barbosa* 作曲：ジャイム・サントシュ *Jaime Santos*  
峰 万里恵さんの大好きなりニャールシュ・バルボーザの歌詞。作曲者も、万里恵さんのいちばん好きなギター奏者です。この曲は、アマーリアさんのためにつくられました。

わたしに、その通りの話をしないで。あの通りは、わたしにとっては、いちばんきれいな通りだった、いまだに。

そう、あなたは黙っていてくれたほうがいい。わたしに、今日の時間のことを話すなんて！ 過ぎてしまったことでも、わたしに話さないで。

あの幻影の時代、わたしは、素朴な白百合のように小さかった。月の光のように純粹、わたしはきれいな女の子だった。その通りの始まりから終わりまで。

小さな四角の模様の、青い上っ張りを着て、学校へかよった。リボンと紐で飾って。

きょうわたしは、ほかの道をたどっている。わたしは、あなたの両腕の鳥かごに捕らえられてしまった。

わたしには楽しい歌たちがあった。はやりだったそんな歌だけしか、今のわたしはうたえない

「見てごらん、悲しいやもめさん。回って歩いてる、泣きながら歩いてる」

わたしは、あの噴水の妹だった。あの正面にあった噴水。わたしは、ベラベラおしゃべりを覚えた、噴水といっしょに。

でも、あとですべては変わった。なぜなら、ある日あなたが通り過ぎたから。あなたが通り、泉はかれてしまった。

わたしの小さな土の水つぼ——変なおもしろい形のつぼ——そうなることに決まっていたんでしょ、こわれてしまった。あなたはわたしを、あなたのものと呼びながら通った。そのときから、もう、わたしは踏んでいない、あの通りの石たちを。

わたしにあの通りの話をしないで……

### 5. ラ・サルサモーラ (野いちご)

### *La Zarzamora*

作詞：ラファエル・デ・レオン／アントーニオ・キンテーロ *Rafael de León / Antonio Quintero*  
作曲：マヌエル・キローガ *Manuel Quiroga*

最高の作者たちによる大長編コプラ。フラメンコが生んだ最高のディーヴァともいうべきローラ・フローレス（ヘレス出身ヒターナ）のためにつくられました。タイトルは、ここでは女性の異名ですが、英語ならブラックベリーかマルベリーだそうです。

カフェ《レバンテ》で、手拍子と喜びのあいだで、サルサモーラはうたっていた。そういうあだ名が付けたのは、彼女の両目が黒く光る野イチゴのようだったからだそう。

彼女にまず話しかけたのは馬商人、オレー！ その

次は侯爵だった。彼女をダイヤモンドでいっぱいにした、オレー！ 頭から足の先まで。

人は言っていた、彼女の心は石だったとか、男たちをおもちゃにしていたのだから。でもある夜、嫉妬に怒りくるって、泣いているサルサモーラの姿が、人に見られてしまった。

どうしたのか？ サルサモーラ、ずっといつまでも、片隅で泣きつづけ。いつも笑って、人々の心をこわしているとうぬぼれていた彼女なのに。

愛することを試して、ひとつの愛情を知った。それが彼女を連れまわす、痛みの街の通りを。

料亭のフラメンコたちは、夜明け前まで彼女を見張る。サルサモーラを魔法にかけて、不幸な愛のことが知りたくて。

夜中の12時が鳴ると、苦悶の歌の調べを、サルサモーラは泣いた。だが、だれにも理由は説明できず、なんでも裏話を知ってるやつも、あの裏切りの悩みのことは知らなかった。

でもある夜《レバンテ》へ、オレー！ ひとりの女が彼女をたずねてきた。彼女を前にして、オレー！ わたしの知るわけもないことを、彼女たちは話し合っ

た。ふたりが何を言ったか、だれにも知られなかった。でも、サルサモーラは彼女に泣きながら言った。歌のひと節で——その歌はすぐに知れわたり、ひとびとはもう、どこでもうたっている。

どうしたのか？ サルサモーラ、ずっといつまでも片隅で泣きつづけ。いつも笑って、人々の心をこわしているとうぬぼれていたわたしなのに。

「彼は結婚指輪をしている」と、わたしは言われた。でももうわたしは彼にキスしてしまった。もう、わたしには遅かった。

みんな、わたしの罪のことを言いふらすがいい、わたしを食べつくしている悩みのことを。そしてみんなわたしのことは放っておいてほしい。このサルサモーラを魔法にかけて、不幸な愛のことを知ったら。

## 6. ファジャーステ・コラゾン (心よ、おまえはしくじった)

### *Fallaste corazón*

作詞作曲：クーコ・サンチェス Cuco Sánchez

これはメキシコの曲ですが、アマーリアさんが大好きだったので加えました。うたいかけられている心は、自分の心なのか、相手の心なのか？ どちらとも解釈できる、あるいは、どちらでもあるのでしょうか。

心よ、おまえは全世界の王様だと信じていた。そしておまえは、許すということが一度もできなかった。冷酷に、あわれみもなく、すべてをあざ笑っていたおまえは、きょう愛情を泣いて求める、お情けでくれる愛情でもいいからと。

おまえの誇りはどこへ行った？ あの勇氣はどこにある？ きょう敗れてしまったから、おまえは慈悲を乞い歩く。

もうわかったろう、愛することと愛されることは同じでないことが。きょう、おまえは終わって

しまった。かわいそうに！ あわれなやつ。

呪われた心よ、わたしはうれしい、おまえがいま苦しんでいるのが。この大きな愛を前にして、泣いて、身をちぢめているのが。

人生はルーレット、そこでは、わたしたちみんなが賭ける。そしておまえには、これまで勝つことしか当たらなかった。

でもきょう、おまえの幸運は、おまえに背を向けた。おまえはしくじった、心よ、もうふたたび賭けるのはおやめ。

## 7. ラグリマ (涙) *Lágrima*

詞：アマーリア・ロドリゲシュ Amália Rodrigues

作曲：カルロシュ・ゴンサウヴシュ Carlos Gonçalves

悩みでいっぱいになって、わたしは横たわる。そして、もっとふえた悩みとともに起き上がる。わたしの胸に、もう居ついてしまったこんなやりかた、あなたがこれほど好きだというこんなやりかた。

絶望——わたしの絶望ゆえに、わたしの中で、わたしは刑罰を受けている。あなたがきらい——わたしは、あなたがきらいと言っている。そして夜は、あなたのことを夢を見る。

いつの日かわたしは、死んでゆくのだということを思うとき、あなたに会えないゆえの絶望のうちに、わたしは地面にショールを広げる。そしてそのまま、まどろんでいこう。

もしもわたしにわかったら——死ぬことによってあなたが、わたしのことを泣いてくれるとわかったら、ひとしずくの涙——あなたのひとしずくの涙ゆえに、どんなにうれしく、わたしは命を捨てるだろう。

ごいっしょに時間をすごしていただき ありがとうございます。  
またお会いするのを 楽しみにしております。今後どうぞよろしく。

選曲・構成：峰 万里恵 プログラム作成：高場 将美

◆ホームページ：<http://mariemine.web.fc2.com/> ◆メール：[marie-mine@hotmail.co.jp](mailto:marie-mine@hotmail.co.jp)